



たいしも通信

下関戦跡シリーズ第12回目となる今回は豊北です。だんだん「戦跡」というキーワードから離れてゆき、今回は既に陸地ではないのはご愛敬ということでは……

さて、下関市の北に油谷湾があり、そこに突き出た油谷半島：と言いたるところですが、正しくはその一帯の名称から向津具半島が正解だそうです。地続きですが油谷島とは半島先端部分のみです。話を戻すと、湾の名称は油谷湾ということで、南側海岸線の西側が下関市、東側は長門市になります。この湾に、何と連合艦隊が頻繁に停泊していたということです。ご存知の方もおられるとは思いますが、少し深掘りしてみます。

◆油谷湾と連合艦隊

資料によると、「大正10年(1921年)戦艦長門以下70余隻が初めて油谷湾に入港、以降、ほぼ毎年のように30〜60隻程度の艦艇が入港した。入港期間は10日間前後で、時には湾外で演習を行うこともあった。」とのこと。

また当時の写真も残っており、ある写真には昭和7年撮影とあり、別の写真では、昭和9年(1934年)8月に68隻が入港とあり、艦船名として旗艦金剛、空母加賀または赤城、と記されています。ただし以後の記録はなく、この年が最後だったようです。ところで、先程から幾度となく「入港」と書いてきましたが、もちろん油谷湾にはそのような大型艦が使用可能な港湾があるはずもなく、湾内で整列して錨泊(錨を下して停泊)したという意味です。

◆油谷湾周辺の状況

地理的な理由として、帝国海軍の鎮守府である佐世保・舞鶴ははるかに遠く、掃海部隊があった吉見(現下関基地隊)には大型艦は入港できず、下関・門司・博多はいずれも商業港です。従って

油谷湾が関門海峡、対馬海峡及び大陸に近く、国防上重要な位置にあった、というのが最大の理由と思われる。

また、市中心部や吉見には帝国陸・海軍の施設がありました。油谷湾周辺には見張り所等を除いて適当な軍の施設はありません。代わりに興味深い資料が残っています。「昭和4年(1929年)、栗野村民、連合艦隊を歓迎、海軍将兵は30隻で合計1万人以上なり、分かれて上陸した。栗野村民は風呂やご馳走をふるまって歓迎した。軍艦の参観も日を決めて許可された。」とのこと、さらには「油谷湾は(中略)軍港に使用されることを村人たちは以前から願っていたが、湾をかこむ半島の一部がくびれて極端に低く、外海から湾内の艦船が丸見えになるといいう難点が軍部から指摘され沙汰止みになった……」とのこと。

最後に、見学した村民の手記を紹介しておきます。「何隻もの漁船に分乗して戦艦長門に近づき、4万トン近い戦艦の、絶壁を見上げるような舷側に降ろされたタラップを登って甲板に立った。まるで運動場を見るような船首甲板の広さ、口径41センチ主砲のバカでかい鉄の塊り、見上げてても視界に納まらない巨大な艦橋などに圧倒され、皆口をつぐんで言葉もなかった。その後、見学者を乗せた戦艦長門は、湾を出て外海を一巡した……」

▼編集後記▲▲

護衛艦「いせ」が2月24日、あるかぼーとに寄港します。一般公開もあるので、詳しくは下関基地隊HPをご確認下さい。「いせ」は満載排水量1万9千トン、全長197mで元海自の自分でもその大きさに驚きますが、約4万トンの戦艦というものはやはり想像を絶しており、件の栗野村民は小型漁船の揺れとは違うため酔いして悔しい思いをした、とあります。しかし「いせ」はスタビライザーがあるので大丈夫です(多分)。

例によって、内容に関する責任は全て支部長にあり、特に規則等に定めてあるもの以外は私の個人的見解が色濃く反映されていますので、ご意見等ございましたら遠慮なくお知らせ下さい。